

令和三年度 第一回 中学入学試験

国語

試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

注意事項

1. 問題冊子と解答用紙を回収するので、両方に受験番号・氏名を記入すること。
2. この問題冊子は、12ページあります。
3. 問題冊子や解答用紙によごれや印刷されていないところがあったら、手を挙げて試験監督を呼ぶこと。
4. 解答はすべて、解答用紙へ記入すること。

受 験 番 号			

氏 名

《二》次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〈アーモンドの花〉

水谷くんは再びページをめくって、今度は桜の花のページを開いた。

「そっくりだろう？ だけど、よく見ると、桜は枝から出た細い茎の先に咲くのにアーモンドの花は枝から直接咲くんだ」

僕は二つのページを見比べる。ほんとだ、という声が思わず漏れた。

それから一拍遅れて今までの話の流れを思い出し、「え」と水谷くんを見る。

「じゃあ、アーモンドの花には毒があったってこと？」

「いや」

水谷くんは短く答え、植物図鑑の上にもう一冊の本を載せた。その表紙の「アレルギー」という文字に目が吸い寄せられる。

水谷くんは「a」息を吸い込み、神秘的な顔で言った。

「おじいさんは、アーモンドアレルギーなんじゃないか」

僕の目をじっと見てから、アレルギーの本のページをめくる。「アレルギー」という項目を開き、指で文字をなぞった。

「代表的なのはピーナツアレルギーですが、その他に、くるみやカシューナツツ、アーモンドがアレルギー源になる場合もあります」

本を僕の方に向けているのだから文字が逆さまに見えるはずなのに、淀みなく読み上げる。

「考えてみれば、もしアーモンドの花に毒があったんだとしたら、同じお茶を飲んだ僕たちも症状が出ていな

いとおかしい。それに、おじいさんはアレルギー用の薬を飲んだらよくなった」

「あ」

① 僕は目をしばたかさせた。そう言えば、そうだ。

「そもそもアレルギー用の薬を持っていたということは、何かのアレルギーを持っていたということだ。それに、おじいさんはクッキーの袋の裏面や包装紙を確かめるように見ていた。そして——アモンドせんべいだけが余っていた※アソートせんべい」

水谷くんはひと息に言い、音を立てて本を閉じる。

「おじいさんの具合が悪くなったのが僕たちの作ってしまったアモンド茶のせいなんだとしたら、おじいさんはあのお茶を飲むたびに具合が悪くなってしまいかもしれない」

おばあちゃんの桜の塩漬けをダメにしてしまったこと、そしてそれを言い出せずに自分でおばあちゃんの作り方を真似して作ったこと——僕が本当のことを白状して謝る間、おじいちゃんは何も言わなかった。

そのことで、僕はますます消え入りたくなる。

おじいちゃんが、瓶を手に取って眺めた。

「そうか……おまえが」

ごめんなさい、と吐き出す声が震える。

おじいちゃんは、瓶をテーブルに置いた。

「でも、どうして本当のことを言う気になったんだ」

「この花は、桜ではなくアーモンドの花だったんです」

僕の代わりに答えたのは水谷くんだった。

その言葉に、おじいちゃんが目を大きく見開く。その瞬間、ああ、と僕は悟っていた。水谷くんの推理はや

はり当たっていたのだ。

「水谷くんが、おじいちゃんがアーモンドアレルギーかもしれないから、このお茶を飲んだらまた大変なことになるって」

「どうしてわかったんだ？」

③ おじいちゃんが、目を丸くしたまま水谷くんを見下ろす。

水谷くんはうつむいたまま、僕に答えたのと同じ推理を口にした。おじいちゃんは水谷くんと僕を見比べる。
「驚いた」

つぶやき以上に、本当に驚いていることはその呆然とした口調から伝わってきた。だが、水谷くんは得意そうにするわけでも、照れくさそうにするわけでもない。

それ自体は、いつものことだった。今までだって、教室で何か問題が起こったときに真相を推理して解決してきた水谷くんは、自慢げに振る舞うようなことはなかった。どんなときも淡々と必要なことだけを口にして、周りがどよめいても平然としていた水谷くん。けれど今日は、どこか居心地が悪そうだった。

そのことにも、僕は申し訳なくなる。

僕が、瓶を割ったりしなければ——せめて、あのとときすぐに正直に謝っていれば。

そうすれば、水谷くんに④ こんな顔をさせてしまうこともなかった。おじいちゃんに苦しい思いをさせてしまうこともなかった。

——僕さえ、いなければ。

おじいちゃんが、ゆつくりと水谷くんの隣にしゃがみ込んだ。

「もう一度、抱いてみてもいいかい？」

キャリーケースを指さし、水谷くんを見上げる。水谷くんは無言でうなずき、キャリーケースの蓋を開けた。嬉

しそうな鳴き声を上げる仔猫を抱き上げ、おじいちゃんに渡す。

おじいちゃんは、b、柔らかなものを手にするような手つきで受け取った。その場で板の間に座り込み、喉を撫でる。仔猫はゴロゴロと喉を鳴らした。だが、もうおじいちゃんの顔色は変わらない。

そして、その静かな横顔からは、何を考えているのかがまったく読み取れなかった。

怒っているだろう、と僕は奥歯を噛みしめながら思う。

ただ瓶を割ってしまっただけならば、怒らなかつたかもしれない。だけど、僕はそれを隠そうとした。ごまかそうとして、おじいちゃんを騙した。おじいちゃんはがっかりしたはずだ。僕がそんなふうには嘘をつくような孫だったこと、そして何より、おばあちゃんの桜の塩漬けがダメになってしまったこと――

もう、おじいちゃんの顔を見ていられなかった。僕はつま先をにらみつけ、拳を強く握る。

食いしばった歯の間から、嗚咽が漏れた。⑤自分が情けなかった。恥ずかしかった。消えてしまいたい、ともう一度思う。

だが次の瞬間、ふいに額に乾いた、けれど⑥温かな感触を覚えた。

ハッと顔を上げた途端、おじいちゃんの腕が視界に飛び込んでくる。

その向こうに見えたおじいちゃんの目は、僕の目を見ていなかった。視線が少し上にずれている。どこを見ているのだろうと不思議になって視線だけを持ち上げると、額に置かれた手のひらにぶつかつた。

おじいちゃんは、僕の頭を見つめたまま、小さく言った。

「……おまえが、覚えてくれていたのか」

何を、と訊き返しそうになって、おばあちゃんの桜の塩漬けの作り方だと遅れて気づく。まぶたの裏に、おばあちゃんの得意料理だった卵の花を自分で作っては、作り方を教えてもらっておくべきだったとため息をついていたおじいちゃんの丸い背中が思い浮かんだ。

うん、と答える声が自分の耳にもかすれて届く。

⑦ やがて額から伝わり始めた細かな震えを、僕は身動きもできずに受け止めていた。

『猫ミス!』より芦沢央あしざわよう「春の作り方」(中公文庫)

※アソート——さまざまな種類のを組み合わせること

問一、

a

・

b

に入れるのに最もふさわしい言葉を次のア～オの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア、そっと イ、すっと ウ、ぎゅっと エ、はっと オ、じっと

問二、——線部①とありますが、この時の「僕」の気持ちとして最もふさわしいものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア、おじいちゃんの具合が悪くなってしまった原因を正確につき止めた水谷くんに感心している。
イ、自分では気づかなかつたが、水谷くんの説明には思い当たるふしがあつたのでびっくりしている。
ウ、水谷くんから意外な話を聞かされて、自分がおじいちゃんにしてしまったことを反省している。
エ、自分が言おうとしていたことを水谷くんが先に話してしまったので悔くみしがっている。
オ、自分が考えてもいなかったことを水谷くんが言ったため、その発言にとまどっている。

問三、——線部②とありますが、ここから読み取れる「僕」の気持ちとして最もふさわしいものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア、さびしくむなしい気持ち。
- イ、つらくて悲しい気持ち。
- ウ、気まずくておじけづく気持ち。
- エ、怒って不愉快ウツクシになる気持ち。
- オ、申し訳なくみじめな気持ち。

問四、——線部③とありますが、この時のおじいちゃん(おじいちゃん)の気持ちとして最もふさわしいものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア、自分の具合が悪くなった原因を、「僕」がアレルギーのせいにして全く反省していないことに怒っている。
- イ、自分のことを気づかい、水谷くんがアレルギーについて必死になつて調べてくれたことに感動している。
- ウ、話した覚えのないアレルギーのことを、水谷くんが具合の悪くなった原因として気づいたので驚いている。
- エ、アレルギーについて学んだうえで、「僕」が本当のことを話してくれたので嬉しく思っている。
- オ、子どもであるにもかかわらず、水谷くんがアレルギーのことを正確に知っていたので不思議に思っている。

問五、——線部④とありますが、それはどのような顔ですか。文中の言葉を使って十字以内で答えなさい。

問六、——線部⑤とありますが、「僕」はどのようなことを情けないと思ったのですか。文中の言葉を使って四十五字以内で答えなさい。

問七、——線部⑥とありますが、だれの何の「感触」ですか。文中の言葉を使って答えなさい。

問八、——線部⑦とありますが、この時のおじいちゃん気持ちとして最もふさわしいものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア、自分が知らなかった桜の塩漬けの作り方を、「僕」が覚えていてくれたことに対する喜び。

イ、水谷くんにすべての説明を任せてしまっている「僕」に対する怒りと、おばあちゃんへの申し訳なさ。

ウ、自分が桜の塩漬けの作り方を教わっていたら、「僕」につらい思いをさせなかったという後悔かい。

エ、正しい推理を行ったうえで勇氣を持って打ち明けてくれた、「僕」に対するほこらしさ。

オ、自分のアレルギーに気づかなかったことに強く責任を感じ、傷きずついている「僕」への同情。

問九、次のア〜カの出来事を起こった順に並べかえなさい。

ア、「僕」が水谷くんと一緒にアーモンド茶を作る。

イ、水谷くんが桜の花とアーモンドの花が似ていることに気づく。

ウ、おじいちゃんがアーモンド茶を飲み、具合が悪くなる。

エ、「僕」と水谷くんがおじいちゃんの体調不良の原因を考える。

オ、「僕」がおじいちゃんに今までのことを全て話す。

カ、おばあちゃんが作った桜の塩漬けが入った瓶を僕が割る。

問十、あなたが今まで、自分の気持ちを相手に正直に話したことで成長できたと感じる体験と、そこから学んだことを書きなさい。

《二》 次の1～5の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1、サイゲンのない質問。
- 2、シユクガ会が開かれる。
- 3、子どもをヤシナう。
- 4、工場へシザイを運ぶ。
- 5、花のメが出る。

《三》 次の1～5の——線部の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- 1、悲喜こもごもの人生。
- 2、検討とウの余地あちがある。
- 3、駅前の銭湯せんとうに行く。
- 4、力を注つぐ。
- 5、弓ゆみで的的を射いる。

《四》 次の1～4の□に、あてはまる漢字一字を入れてことわざを完成させ、それぞれの□に入った漢字を画数の多い順に並べかえなさい。

- 1、立つ □ 跡を濁さず
- 2、立て □ に水
- 3、□ は熱いうちに打て
- 4、□ は気から

《五》 次の1～3の説明にあてはまる四字熟語を後の□から選び、それぞれ漢字に直しなさい。

- 1、あまりにひどくて言葉も出ないほどであること。
- 2、のがれることが出来ないほどに追いつめられた状態。
- 3、今にもだめになりそうな物事を立て直すこと。

ぜったいぜつめい	ごんごどうだん	いみしんちよう	たりきほんがん	きしかいせい
----------	---------	---------	---------	--------

《六》次の1・2について、熟語の成り立ちが他とはちがうものをア～オの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|---------|------|------|------|------|
| 1、【ア、新年 | イ、海底 | ウ、童話 | エ、曲線 | オ、国立 |
| 2、【ア、苦楽 | イ、願望 | ウ、減少 | エ、指示 | オ、運行 |

《七》次の1～3の——線部と同じ意味のものを、後のア～エの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

1、母に呼ばれる。

ア、先生が話される。

ウ、主将を任される。

イ、昔のことが思い出される。

エ、かさをさせば行かれる。

2、きれいな教科はない。

ア、勇気がない。

ウ、今年は雪が少ない。

イ、手伝いをしない。

エ、たわいない話をする。

3、先生の書かれた手紙。

ア、これは君のですか。

ウ、秋の雨がふってきた。

イ、今日は星の多い夜だ。

エ、一人でやるのはむずかしい。

